

## 定年退職なさる先生がたからのメッセージ

### 定年退職を迎えて

遠藤潤一

本学には十二年間お世話になった。開学以来という先生方と比べるとほんのわずかな年数だが、私にとつては一箇所の勤務年数としては最長記録である。高等学校に十年、大学に八年と七年、短期大学に五年、これが本学就任以前の私の勤務歴である。また、本学では、昔風の言い方をすると、三人の学長に仕えたことになる。これも、それまでには無かった経験である。

本学での十二年間、振り返ってみると色々なことが次から次へと思ひ浮かぶが、学生たちとの密接なかかわりといったら、やはり三年生・四年生のゼミの思い出である。三年生の演習Ⅰから引き続いて四年生の演習Ⅱとなる学生がほとんどだったので、二十五名以下の少人数の学生と二年間つきあうことになる。学生たちもゼミ仲間の親密なつきあいができあがるようで、ゼミの時間は家庭的などと言ってよいような一種の雰囲気が生じていたものだ。ゼミ通信という小冊子を作ったりして、——。そんな活気というものを本学ではじめて経験した。

その、ある冊子（三年生編集）のページ。

「合同ゼミこんば」

先日、鶴の一声ならぬ遠藤先生の一声で三年生・四年生合同ゼミコンパが催されました。この日は四年生

のゼミが最後という晴れがましい日となりました。

風邪がはやっていたので、三年生は全員参加というわけにはいかずに、少し残念な結果になってしまいました。(四年生は全員参加でした)

けれども初顔合わせということでも、とても意義のある集まりだったと思います。

横長のテーブルだったため、自己紹介の声が聞きづらかったと思いますので、一応座席表を載せます。来年度、こういう機会を設ける際は名札をつくるなど工夫したいと思います。

その時のメニュー(「ズワイガニ(なぜか味なし)、サラダ(大根とシーフード、他レタス、トマト、オカカ)、ロシア風壺焼きタンシチュー、エビ焼売、にら餃子、白魚のマリネ、ピザ、レディーのみ焼きイモ(英字新聞包み)」。メニューは以上であるが、なぜか飲み物については一切触れていない)、そして座席表、それから三年生に向けての四年生の卒論体験談等々が載っている。驚いたことに、「跡見女子大学23年の国語学ゼミ卒論テーマ一覧表」というのを作成してあって、昭和四十三年度の「紫式部日記における敬語」からはじまり、合計七十八編の題名と執筆卒業生の姓名が並んでいた。それにしても、よく調べたものだ。これには恐れ入ってしまった。

このようなゼミ通信誌は特別であったが、その後もこれに類した冊子はよくつくられていたものだ。学生たちが私についていただく印象は「やさしいんだか、冷たいんだか、…」等々さまざまであったが、それらを集約して私なりにまとめると、「わけのわからない変な人」というところに落着くのではないかと思っている。

そういえば、本学での十二年間、私は変な研究もしていたのは確かだ。この際、それについて一言述べる責任があると思う。私が着任した当時、本学は文学部のみで、国文学科等々の四学科制であった。私の所属した国文学科には『国文学科報』という機関誌があり、それに私はほぼ毎年のように『サントスの御作業』と『黄金伝説』という題の論文を書いていた。人文学科になってからも、『人文学フォーラム』に引き続き掲載して

いただき、その続き物は「その八」で終りをむかえることになった。だが、実は研究そのものとしては約五割を書き終えたにすぎない。平成五年の着任以来、定年退職までの年数を数えて、私の研究ノートの内容と見比べ、その年数だけあれば定年退職時にはうまく完結するはずと胸算用していたのだが、結果としては五割しか達成できなかった。赤面の至りである。人生における誤算の一つと言えそうだ。

『サントスの御作業』と呼ぶその本は現存キリシタン版中最古のもの（一五九一年刊）で、三〇〇ページを超える日本語訳ローマ字表記の「キリスト教聖人伝」で、私に言わせれば本文研究があまりされていない本だった。キリスト教聖人伝であるからには、その一六八ページまでは一五世紀のかの有名なヤコブス・デ・ウオラギネの『レゲンダ・アウレア』すなわち『黄金伝説』と呼ばれる聖人伝と何らかの関係があるはずである。都合の良いことに、人文書院からその日本語訳本が刊行された（昭和五十四年〜六十二年）。刊行の完結を待って、私はその日本語訳本文と『サントスの御作業』（以下、(サ)と略称する）の本文との比較検討をはじめたのである。まともな研究であれば、まず(サ)の本当の原典（多分ラテン語本か）を探索し、その原典と(サ)の日本語訳文とを比較検討するわけだが、私にはそれをする知識と時間ともう一つのものがないので、「隔靴搔痒」のそしりを免れがたいのは覚悟の上ではじめた研究なのである。先ほど「変な研究」と言ったのはこのような意味からである。しかし、問題の予測的・試掘的研究なら充分に可能であろうと考えてははじめたのである。

その結果としての例を少々挙げてみよう。

(サ) かの成敗を行ひたる者ども——、(パウロは) ぶしの谷といふ所に首はなくして居らると言へり。

これは福島邦道著・勉誠社刊『サントスの御作業・翻字研究篇』の翻字本文（漢字仮名に直した本文。聖パウロの章）であるが、筆者傍線部「ぶしの谷」は地名かとも思われるが、はつきりしない。前田敬作ほか訳・人文書院刊『黄金伝説』（以下、(黄)と略称する）を見ると、

(黄) 刑吏は答えました。(パウロは) 相棒だった男(ペテロ)といっしょに、城外の戦士の谷にころがって  
ござるのさ。――)

とあるのである。つまり、(サ)のは「武士の谷」という谷の名前であったのである。

(サ) 汝は終りなき死するの道をもつて死せんこと不便なり、その故は、少しも罪なきゼズキリストの御臣  
下を誅すればなり

(黄) お気の毒ですが、あなたは、天主の聖人たちを法にそむいて殺したので、永劫の死を受けなくてはな  
りません

この例(聖パウロの章)の筆者傍線部の対応も面白い。(サ)では概念的にすっきりととらえることができず、こ  
のように長たらしい訳出となったのか。キリスト教において「永劫の死」という概念は重いはずである。訳者  
がそのことを認識していれば(黄)に近い訳出ができたのではないかとも思われる。または、「終りなき死」と  
いう表現で概念化していたのか。なお、キリシタン版『日葡辞書』(岩波版の訳本による。以下同様)では「ヤウ  
ゴウ(永劫)」は「永続すること、あるいは、永久のもの。」と説明している。

(サ) (ヨハネは)或る時エヘソにて風呂に入り給へば、セリントといふエレゼ(異端者)風呂の中に居ければ、  
――いざただ帰るべし、まことの敵と、悪人との居所に居て、風呂崩れて上に落ちば、損たるべしと宣ひ  
て、帰り給ふなり

(黄) (ヨハネは)あるとき、エペソスの町の浴場に行き、そこで異端者のケリントスに会った。彼はすばや  
く風呂からとび出して、こう叫んだ。「浴場が頭のうえに倒れてこないうちに逃げなければならぬ。なに  
しろ、真理の敵ケリントスが入浴していたから」

この例(福音史家聖ヨハネの章)の筆者傍線部などは(黄)との対比で読まないと「まことの」は「本当の」の

ような意味で読んでしまいかねない。『日葡辞書』では「シンリ（真理）」は「真実の理論、あるいは、道理。」とある。だが、「真理の敵」という概念化はまだ無理であったのか。なお、(サ)の「悪人」は、(黄)には対応する語がない。

このように対応関係が認められ、いろいろなことが考えられれば考えられるほど、(サ)の原典の本文ではどうであったのかという疑問点が多くなるわけで、改めて本格的検討の必要性を強く認識させられるわけだが、それはそれとして、(黄)との比較も本文批判の前段階ぐらいの意義があるようにも思われるのである。

(サ) 帝王これを見て、大きに驚き、この人(イグナチオ)の死骸を取らんと望む者あらば、制することなかれと、下知せらるるによつて、キリシタン取り、ねんごろに収め奉るものなり。

(黄) 皇帝は、これを見てたいへんおどろき、「この人(イグナチオス)の遺体をもらい受けにくる者があれば、けつして邪魔をしてはならない」と命令して立ち去った。こうして、キリスト教徒たちは、彼の遺体を引きとつて、ねんごろに葬った。

殉教者(聖イグナチオ)を葬ったというこの部分などは(サ)の原典も(黄)の原典と同文だったのかもしれない。それにしても筆者傍線部、一六世紀の日本人の訳と二〇世紀の日本人の訳とがともに情趣を感じさせる一致した表現となっている点に、私は不思議な感動を覚えるのである。

完結せずに終りをむかえてしまった拙論について責任を感じて筆を走らせたことから、未練がましく、ついこのように長くなってしまった。しかし、それにしても研究論文について最近では一般的に規定・規格がきびしく云々されるが、そもそも研究というのは自由なものだと私は思っている。しかし、時代はかわり、一般的に大学そのものも変容した。このことを考えると、この節目に定年退職を迎えることに、私は私の人生にとつての大きな意義を感じないわけにはいかないのである。

ところで、私の大学生のころは「国語学」というと毛嫌いする学生が多かった。「国語学」すなわち「国文法」というような認識が一般的だったからかもしれない。本学では人文学科になるまでは「国語学概論」は必修科目であった。人文学科になって、これも選択科目（総論）となった。選択になったら履修者がかなり減るだろうと思っていたのだが、その予想は外れ、年を経るほどに受講者が増えている。そのほかの国語学系の科目も同様で、最初の授業で学生が教室に入りきれなくて、教室変更を教務課に申し入れなくてはならないこともしばしばであった。まじめに話を聴き、ノートをとる学生もかなり視野に入る。私にとってはなんといいってもこれが一番の張り合いである。これによって勇気づけられ、今日までがんばることができたと言っても過言ではない。

最後になったが、私を支えてくださった多くの学生諸姉、そして諸先生、職員のかたがたに心から御礼を申し上げる。職員のかたがたとのへだたりのない交流も、本学での経験として忘れることができない。

大学院を開設した本学の今後ますますの発展を祈念してやまない。

遠藤潤一（えんどうじゅんいち）



生年月日

一九三四年四月二五日

学歴

一九六三年三月 國學院大學文学部一部文学科日本文学専攻卒業  
一九六六年三月 國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了  
一九六九年三月 國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学

職歴

一九六三年四月 横須賀学院高等学校校定時制教諭（一九七二年四月・全日制）  
一九七三年四月 徳島大学専任講師教育学部  
一九七四年八月 徳島大学助教授教育学部  
一九八〇年七月 徳島大学教授教育学部  
一九八一年四月 奈良大学教授文学部国文学科  
一九八八年四月 東横学園女子短期大学教授国語国文学科  
一九九三年四月 跡見学園女子大学教授文学部国文学科  
この間、国立国語研究所地方研究員（徳島県の方言調査を担当、一九七七年四月～一九八〇年三月）、全国大学国語国文学会編『文学・語学』編集委員（一九九四年度～一九九五年度）などをつとめた。

業績

【著書】

『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究・正編』（一九八三・一、風間書房）  
『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究・続編』（一九八四・一、風間書房）

（一九八四年二月、右記の二書により第三回新村出賞を受賞）  
『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究・総説』（一九八七・二、風間書房）

『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』（一九九三・四、風間書房）

『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』（一九九三・四、風間書房）

【学術論文】

『日葡辞書の欠陥動詞』『徳島大学学芸紀要・人文科学 第二四』

- 卷』(一九七四・一〇、徳島大学教育学部)
- 「天草版アルヴァレス・ラテン文典の欠陥動詞について」『国語研究 第三八号』(一九七五・三、國學院大學国語研究会)
- 「日葡辞書の動詞見出し語記述における一問題―過去形を欠く動詞をめぐって―」『徳島大学芸紀要・人文科学 第二五卷』(一九七五・一〇、徳島大学教育学部)
- 「日葡辞書の動詞見出し語記述における一問題―そのⅡ・現在形表示の異例をめぐって―」『徳島大学芸紀要・人文科学 第二六卷』(一九七六・一〇、徳島大学教育学部)
- 「いそば物語試論・その五」『國學院雑誌 第七九卷 第一二号』(一九七八・一二、國學院大學)
- 「四国における禁止の一表現法―〈言ワレン・捨テラレン〉の系譜について―」『平山輝男博士古稀記念・現代方言学の課題 第三卷・史的研究編』(一九八四・六、明治書院)
- 「『サントスの御作業』と『黄金伝説』・その一」『国文学科報 第二二号』(一九九四・三、跡見学園女子大学国文学科)
- 「『敬語掌論』の割りばしはお付けしますか」等々」『国文学科報 第二八号』(二〇〇〇・三、跡見学園女子大学国文学科)
- 「『エソポのハブラス』考―E. M. サトウの解題をめぐって―」『国語研究 第六四号』(二〇〇一・三、國學院大學国語研究会)
- 「『サントスの御作業』と『黄金伝説』・その七」『国文学科報 第三〇号』(二〇〇二・三、跡見学園女子大学国文学科)
- その他省略。